

# 放射線看護におけるポジティブシンキングの力

## The power of positive thinking in radiological nursing care

中馬 育子

Ikuko CHUMAN

第4回日本放射線看護学会学術集会 会長  
メディポリス国際陽子線治療センター

Medipolis Proton Therapy and Research Center

日本放射線看護学会学術集会は4回目にして臨床の現場で開催となり、放射線診療に携る私たちにとり、大変貴重な機会を得ました。放射線診療における看護は、文献僅少、人員稀少という閑寂とした時代から、がん放射線療法看護認定看護師の分野特定と本学会による放射線看護学の確立に向けた活動を得て、急激な成長の過渡期にあると感じます。所属施設の異なる看護師が個々の研究成果を持ち寄り議論する機会は非常に意義深く、その裾野が広いほど、よりよいケアのエビデンスが築かれ現場に還元されます。ひとりでも多くの臨床看護師が疑問解決の楽しさを知り、学術的な視点をもって日々の看護に向かえば、エビデンス構築の推進力となる—そんな青写真を描きながら会長講演は学術的な裾野を広げる足掛かりにしたいと考えました。

私が従事する陽子線治療は、開設当初全国に5施設のみで実施されており、私たちは先行施設から放射線を含む陽子線治療看護の技術を学び、患者に対応していましたが、経験を重ねるごとに次々と疑問が湧いてきました。そこで困った看護スタッフの疑問を収集し、少しずつ明らかにしてケア方法の改善に繋げています。その疑問解決とケア方法改善の過程で学会発表に至った成果の一部を紹介します。

### ①温泉は、放射線性皮膚炎に影響しないのだろうか。(2012年)

これは当施設ならではの疑問といえるが、温泉愛好家は全世界にいるため公的疑問として学会発表した。

皮膚線量の個人差が少ない前立腺がん治療患者を対象に、温泉利用患者群と非利用患者群の放射線性皮膚炎の重症度を調査した。両群に有意差はなく、温泉は皮膚炎の増悪因子ではないことが明らかになった。

### ②放射線肺臓炎の発生時、戸惑う患者・家族の不安を軽減できないか。(2012年)

治療後に放射線肺臓炎と診断され不安を訴える患者の相談を受けたため、肺がん治療患者の放射線肺臓炎の発生状況を調査した。CT画像上では、局所的な肺炎像が約8割に見られたが、咳嗽などの呼吸器症状出現はそのうち半数、内科的療法を要した患者は2割に満たなかった。その結果を患者教育に加え、事実に基づいた情報提供によって肺臓炎の対応に戸惑う患者はみられなくなった。

### ③皮膚にどれくらいの線量が当たれば、放射線性皮膚炎が起こるのか。(2012年)

放射線性皮膚炎の発生頻度が高い体幹部の治療患者について、医学物理士と協力し皮膚の最大総線量と放射線性皮膚炎の発生および重症度の関係を調査した。皮膚への線量が45.6 GyEを超えるとGrade3の皮膚炎が出現するリスクが高まることがわかり、治療計画時の手順に皮膚最大総線量の算出が加えられ、45 GyEを超える治療計画の際には、皮膚炎の重篤化を見越した対応を行うよう改善した。

### ④放射線性皮膚炎のGrade判定に悩んでしまう、スタッフ間で判定を統一することはできないか。(2012年)

放射線性皮膚炎の評価基準は規定されているが、簡潔な文章のため解釈が曖昧であり、多くのスタッフ

から悩みとして挙げた。医師の協力を得て放射線性皮膚炎の写真 100 枚を厳選し、Grade と判断根拠を付記したクイズ形式の皮膚炎学習ソフトを作成した。一定の学習効果が確認でき、教育システムに取り入れた。

⑤陽子線治療を受ける患者はどのような思いを抱えているのか。(2012 年)

治療装置見学会に参加した患者・家族にアンケートを実施、自由記述の内容を KJ 法で分析した。その結果、陽子線治療が世間に知られていないゆえの患者・家族の苦悩が伺え、また、治療後の経過について不安を抱えていることが明らかになり、治療後の経過観察の時期に向けた看護介入を組み入れた。

成果の振り返りをみて、短期間にどうすればここまでできるのかと不思議に思われる方も多いと思います。私も同感です。当初、疑問の解決が私の目標であり、学会発表は将来的なビジョンでした。しかし、放射線領域の看護の現状を目の当たりにしてきた医療部長は、自分たちの疑問は放射線治療分野の疑問であり、放射線治療専門施設として成果を公に還元する責務があると論じ、看護師の研究を熱心に導いてくれ、また「よりよい治療を提供する」同じ目標をもつ他職種の惜しみない協力があって実現したものです。公表した成果がよりよい看護に繋がるヒントになっていれば無上の喜びですが、自分たちのふとした疑問や悩みから生み出されたエビデンスは、看護師に自信をもって看護を提供する効果をもたらし、疑問を抱く感性を養ってくれると感じます。

放射線診療に携る看護師は、組織が大きいほど希望にそぐわない配属や、他部門の理解不足などさまざまな障壁を感じながら必死に患者に寄り添い、研究に費やす時間も労力もままならない環境の方も多いと思います。その中で今回学術集会では臨床から多くの演題登録をいただき、皆さんのチャレンジ精神を感じました。未熟と思える演題もありましたが、本学会は放射線看護の質向上を目的としていますので、会員を学術的に導く役割があります。研究発表は高い壁と考えずにチャレンジを積み重ね、疑問や成果を共有しましょう。学会は皆さんを応援しますので、安心して臨床での疑問解決に取り組んでほしいと思います。